

Jリーグ20周年記念「ショートショートフィルムフェスティバル & アジア」とのタイアップ 開幕20周年を記念して特別ショートフィルムを製作 ～監督はLA EigaFest 2011 最優秀短編映画賞を受賞した大川五月氏に決定～



Jリーグは開幕20周年となる2013年に向けて、アジア最大級の国際短編映画祭「ショートショートフィルムフェスティバル & アジア」(代表: 別所哲也)とタイアップし、特別ショートフィルムを製作する。作品の監督には、Jリーグとショートショート実行委員会の選考によって、大川五月(おおかわ

さつき)氏を採用することが決定した。大川氏は現在、アメリカのニューヨークを拠点に活動し、LA EigaFest 2011 最優秀短編映画賞などを受賞。「日本サッカーと日本人の関わり、触れ合いを通して、希望、真心など、日本人の良さ、魅力を出せるような作品にしたい」と抱負を語った。作品は13年のショートショートフィルムフェスティバル & アジアでプレミアム上映の予定。



左から、別所氏、大川氏、ゲストとして出席した元Jリーグ選手の武田修宏氏、大東チェアマン

ACLで日本勢の8強入りは成らず



AFCチャンピオンズリーグ2012(ACL)で日本勢の8強入りは成らなかった。同大会には、日本から柏レイソル、FC東京、名古屋グランパス、ガンバ大阪の4チームが出場。柏、F東京、名古屋がグループステージを勝ち抜くも、1試合制のラウンド16で5月29日に名古屋がアデレード・ユナイテッド(オーストラリア)に0-1と惜敗した後、翌30日に柏が蔚山現代(韓国)に2-3、F東京が広州恒大(中国)に0-1で、ともに敗れた。

東日本大震災関連復興支援について

Jリーグは6月19日に開催した理事会で、現在、Jリーグ開催スタジアムなどで実施している「Jリーグ TEAM AS ONE 募金」の具体的な使途と、Jクラブが今後実施する復興支援・被災地支援活動への支援を行うことを承認した。

「Jリーグ TEAM AS ONE 募金」の具体的な使途について

内容 「Jリーグ TEAM AS ONE 募金」でグラウンド用簡易照明を購入し、被災地沿岸部に寄贈する。現状では14カ所を予定。受け入れ状況を確認した上で、最終的に寄贈先を決定する(1カ所につき2基)。

Jクラブが実施する復興支援・被災地支援活動への支援について

内容 Jクラブが今後実施する復興支援・被災地支援活動の費用について、Jリーグのガイドラインに基づき、支援を行う。1クラブの申請回数は、2012年度は上限2回とし、それを上回る支援を希望する場合は別途調整する。

夏期の試合開催時における節電に関する取り組みについて

Jリーグでは、今夏の全国的な電力需給バランスの悪化を見据えて、スタジアム所有者など関係者と調整の上、下記の通り節電に関する取り組みを実施する。

開催条件の変更	スタジアムにおけるナイトゲームについては、行政の方針に基づき、需要抑制のために必要な場合に限り、照明装置の照度を1,000ルクス以上で開催することを認める。照度設定については、スタジアム所有者と調整の上、決定する。 ※照度設定を1,500ルクス未満にする場合は、事前にJリーグまで連絡する。 【参考】Jリーグ規約 第29条(スタジアム) (6)スタジアムには、ピッチのいずれの箇所においても1,500ルクス以上の照度をもつ照明装置を設置し、明るさを均一にしなければならない。
対象Jクラブ	全国の全40クラブを対象とする。
期間	2012年6月16日～9月30日
照明装置以外の節電項目	下記の節電項目を参考に、スタジアム所有者と調整の上、決定する。 ①空調設備の設定温度を上げる ②余分な照明を消す・電灯を間引く ③待機電力を削除する ④クールビズの実施 ※大型映像装置については、緊急時の案内でも必要となるため使用するが、使用時間などを調整し、節電に努める。

大会の後援

Jリーグは6月19日に開催した理事会で、以下の大会の後援を決定、承認した。

決定	<ul style="list-style-type: none"> ・メニコンカップ2012日本クラブユースサッカー東西対抗戦(U-15) ・2012 コカ・コーラウエスト サンフレッチェカップ(U-15/U-12) ・第13回豊田国際ユース(U-16)サッカー大会 ・かんきょうみらいカップ2012
承認	<ul style="list-style-type: none"> ・adidas CUP 2012 第36回日本クラブユースサッカー選手権(U-18、U-15)大会 ・日本クラブユースサッカー選手権(U-15)大会 デベロッパカップ2012 ・堺市長杯 2012中日本インターシティカップ(U-15) ・第8回JCYインターシティカップサッカー(U-15)西日本大会

「Jリーグアカデミー カルビーグローバルチャレンジ」を新設

～国際親善と次世代育成をテーマに、最優秀育成クラブを国際大会へ派遣～

Jリーグは2012年より、Jリーグトップパートナーのカルビー株式会社(東京都千代田区:代表取締役社長兼COO 伊藤 秀二)の協力のもと、「Jリーグアカデミー カルビーグローバルチャレンジ」を設立する。

カルビー(株)は、日頃から社会貢献のミッション・ステートメントにおいて、地域社会のみならず、「全世界の共同社会に貢献」することを掲げている。本プログラムは、カルビー(株)とJリーグによる、国際親善と次世代育成をテーマとしたパートナーシッププログラムとして、Jリーグアカデミーの狙いである「世界で活躍する選手の育成および強化」の促進を目的としている。

プログラム設立初年度のことは、7月15日(日)～21日(土)にスウェーデンで開催される「Gothia Cup 2012」に、2011 Jリーグアウォーズ 最優秀育成クラブ賞受賞の東京ヴェルディユース(U-16)が、Jリーグアカデミー代表チームとして参加する。

2012年度(平成24年度)決算および収支予算について

Jリーグは6月12日に開催した総会で、2012年度(平成24年度)の社団法人 日本プロサッカーリーグの決算(公益社団法人移行前の3カ月(1-3月)決算)を承認した。また、2012年4月1日付けで公益社団法人に移行したことに伴い、9カ月の収支予算(4-12月)を承認した。

■2012年度(平成24年度)決算および収支予算

※2012年4月1日付けで公益社団法人へ移行したことに伴い、新会計基準を採用したため、決算については正味財産増減計算書(A)、収支予算については収支予算書(正味財産増減計算書ベース)(B)で表示。

科目	2011決算 9か月(4-12月) 参考	2012決算 3か月(1-3月) (A)	2012予算 9か月(4-12月) (B)	合計 (A+B)
I 一般正味財産増減の部				
1. 経常増減の部				
(1) 経常収益				
基本財産運用益	0	0	0	0
受取入金	0	100	0	100
受取会費	1,126	291	873	1,164
協賛金収益	3,054	925	2,769	3,694
Jリーグ主管試合入場料収益	110	74	230	304
放送権料収益	4,340	490	4,354	4,844
商品化権料収益	404	253	451	704
その他	854	137	905	1,042
経常収益計	9,888	2,270	9,582	11,852
(2) 経常費用				
① 事業費	9,194	2,112	9,814	11,926
リーグ運営経費	1,892	668	2,446	3,114
クラブへの配分金	6,434	1,067	5,800	6,868
その他	869	377	1,568	1,945
② 管理費	464	93	247	340
経常費用計	9,658	2,204	10,061	12,266
当期経常増減額	230	66	▲479	▲413
2. 経常外増減の部				
(1) 経常外収益	4	0	0	0
(2) 経常外費用	26	0	0	0
当期経常外増減額	▲22	0	0	0
当期一般正味財産増減額	208	66	▲479	▲413
一般正味財産期首残高	1,815	2,023	2,089	2,023
一般正味財産期末残高	2,023	2,089	1,610	1,610
II 正味財産期末残高	2,023	2,089	1,610	1,610

※四捨五入により、合計が合わない場合があります。

Jクラブと歩む「地域」「ひと」

27

アルビレックス新潟



スポーツ振興の目標達成に向けて 欠かせないクラブとの結び付き



なでしこリーグの試合前に行われた「ふれあいサッカー教室」。子どもたちの元気な声が響いた

©ALBIREX NIIGATA

目を輝かせる子どもたち

アルビレックス新潟のホームタウン・新潟市が行う年2回の「ふれあいサッカー教室」。晴れ渡った空の下、アルビレックス新潟レディース(新潟L)の3選手と子どもたちが、ボールを追い掛けて走り回った。5月20日に行われた教室には、定員を大きく上回る市内の小学1～6年生の男女約200人が参加。参加した鏡淵小4年の太田美優さんは「選手はすごく上手で、ミニゲームではボールを取られた。もっと練習してアルビの選手のようにになりたい」と目を輝かせた。ミニゲームなどで触れ合った後は、同会場で行われた新潟LとINAC神戸レオネッサの試合を観戦し、大きな声援を送った。

教室は、同市がスポーツの振興と青少年の健全育成、市民の連帯感の醸成と地域の活性化を増進させることを目的に、2003年から始めた「ドキドキ・ワクワクスポーツふれあい促進事業」の一環として行われたもので、ことで10年目を迎えた。新潟LのGK一谷朋子選手は「チーム、選手のことを知ってもらえるいい機会。また多くの子どもたちに参加してほしい」と充実の表情。25年活動する「豊照サッカー少年団」で指導する大島久和さんは、「身近にプロがいるのは大きい。新潟全体のレベルが上がっていると思うし、子どもたちと接する機会を続けてほしい」と話すなど、大人にも好評だ。

「まずはサッカーをスポーツとして楽しんでもらうことから始まる」。子どもたちの歓声に目を細めるのは、新潟市スポーツ振興課の笠原一男課長。「新潟市のスポーツ振興にとって、土台になっているのがアルビ」と力を込める。

同事業はふれあい教室の他、例年、市内の40～50の中学校とクラブチームに対し、アルビレックス新潟の育成普及部コーチの指導者派遣も行う。委託事業として全面的にクラブが担っており、競技力の向上とともに、競技人口の拡大を目指す。アルビレックス新潟の堀沢清普及部長は「すぐに効果が表れるわけではないが、取り組みを通じて新潟の子どもが、いずれはアルビレックス新潟でプレーしてくれればいい」。育成を重んじるクラブとしての夢を描く。



笠原一男氏

連携、協力を続けて裾野を拡大

「アルビの効果は多方面に波及する」と笠原課長。新潟市は12年度、スポーツを見ることの楽しさや喜びをさらに感じてもらうため、地元プロスポーツチームとの交流など、事業規模を拡大。7月以降のホームゲーム8試合に、市内在住の小中学生とその保護者を招待する機会を新たに設けることを決めた。入場者数の減

少は、クラブだけでなく交流人口拡大を図るホームタウンにとっても課題の一つ。笠原課長は「生で見る雰囲気味わって、関心を持ってもらうことで、入場者数も増えていけば」と語る。同じくクラブのホームタウンの聖籠町に加え、新潟県もホームゲーム観戦の機会を提供する取り組みを強化するなど、新たなファン・サポーターの掘り起こしに力を入れる。

さらに新潟市は、06年に策定した市スポーツ振興基本計画「スポ柳都(ると)にいがたプラン」の目標達成に向けても、クラブとの結び付きが欠かせないとする。計画には、誰でもスポーツを楽しむことができる生涯スポーツ社会の実現や競技力の向上、スポーツ観戦機会の増加など四つの基本方針を据える。「ふれあい促進事業は、基本方針にマッチしている。活動の効果は出ていると思う」(笠原課長)。計画には、週1日以上スポーツに取り組む市民の割合を14年までに50%にする目標があり、割合は策定前の15.9%(03年)から36.1%(08年)に増加。地道な取り組みが実を結びつつあるとする。

現在の東北電力ビッグスワンスタジアムを使用する以前は、新潟市陸上競技場をホームスタジアムとして使用していた。新潟市が、陸上競技場のスタンド改修やスコアボードの新設といった工事を行ったのが1994年。そこから市民の関心、サッカーを通じた地域の一体感を高めようと支援の取り組みを広げていった。機運の高まりとともに、アルビレックス新潟はJFLからJ2、そしてJ1と着実にステップアップしていった歴史がある。笠原課長は「連携、協力を続けながら裾野の拡大に努めていきたい」と今後を見据える。アルビレックス新潟は、ことでJ1昇格9年目。熱狂的なサポーターに支えられてきた地方クラブは、地域のさらなる後押しを受け、歩みを進めていく。

(新潟日报社 富山 翼)



地域の子と触れ合う新潟Lの上尾野辺めぐみ選手
©ALBIREX NIIGATA

「豊かで充実したスポーツ環境を実現し、地域に根差したスポーツクラブを中心に、日本にスポーツ文化を育む」ことを目指す「Jリーグ百年構想」のもと、Jクラブはそれぞれのホームタウンを中心に、さまざまな取り組みを行っている。そして、Jクラブの存在、活動は、地域とそこに暮らす人々に影響、刺激を与え、新たなムーブメントを生んでいる。Jクラブと手を携えながら、ともに歩む人々や、その活動を紹介するこのシリーズ。今号ではアルビレックス新潟、京都サンガF.C.と連携した地域の取り組みにスポットを当てた。



28

京都サンガF.C.



選手訪問の刺激が教育への高い効果に。 地域との共生を目指す草の根活動と両輪



久保選手と一緒にミニゲームを楽しむ安井小学校の児童たち

©KYOTO.P.S.

長年の積み重ねの意義

5月17日、京都サンガF.C.のホームスタジアム、京都市西京極総合運動公園陸上競技場兼球技場にほど近い京都市右京区の安井小学校に、トップチームで活躍する久保裕也、伊藤優汰、守田達弥(現 カターレ富山)の3選手が練習着で訪れた。出迎えたのは3、4年生113人。体育の授業を利用してサンガの選手がサッカーを教える「京都サンガF.C.スポーツアカデミースペシャル」が始まった。

この取り組みは2002年にスタート。毎年2～3回、トップチームの選手がホームタウンの小学校に出向く。10年間で京都府内の延べ186校を訪問した。朴智星(マンチェスター・ユナイテッド/イングランド)や松井大輔(ディジョン/フランス)ら、サンガから世界へ巣立った選手も過去に参加。選手にも学校側にも、すっかり定着し、好評を得ている。

「子どもが生き生きとしていますね」。児童が選手と一緒にボールを蹴る様子を見ていた安井小学校の坂本香代子校長は声を弾ませた。ミニゲームの最中、歓声は絶えない。伊藤選手が汗だくになり



坂本香代子氏

ながら得意のドリブルで児童を引き連れ、久保選手はシュートを決めた子どもとハイタッチをして笑顔で祝福した。最後に質問コーナーがあり、児童たちは「サッカーはいつから好きになったの?」「強いシュートはどうやって打てるの?」

などと興味津々の様子で尋ねた。

坂本校長は「子どもたちは久保選手が日本代表に選ばれたことも事前にリサーチして会えるのを楽しみにしていた。刺激を受け、感動して心を揺らすことが自分を高めるきっかけになる。子どもたちはこの授業を一生忘れないでしょう」と、教育への高い効果を説く。選手も感銘を受けたようで、初

めて参加した18歳の久保選手は「子どもは大好きなので楽しかった。これをきっかけに西京極でのホームゲームに応援に来てくれたらありがたい」と期待を寄せた。

随行したホームタウンアカデミーの中川英之コーチは、10数年前に普及活動で訪れていたころと比べ、子どもたちのサンガに対する反応が大きく変わった、と感じている。「昔はまず、サンガというクラブを説明しなければならなかったが、今では京都のプロサッカークラブとすでに分かってもらえるようになった。トップチームの選手が自分たちの学校に来てくれ、身近に感じられるこの試みは大きい」と長年の積み重ねと事業の意義を強調する。

深い結び付きを求める活動

ことし2月からは一風変わった普及活動をスタートさせた。技術向上やボール遊びを楽しむ従来型のサッカー教室ではなく、仲間づくりやコミュニケーション能力の養成に重きを置いた「サンガつながり隊」だ。

同様の手法を用い、ジェフユナイテッド千葉での8年間で約40万人の子どもに指導してきた池上正氏をホームタウンアカデミーダイレクターとして招き、週に4～5回、京都府内の小学校を巡回している。

6月6日、府南部にある精華町の山田荘小学校で5年生の体育の授業を担当した。池上ダイレクターが手をたたいた数と同じ人数でチームをつくり、手をつないでコーンを回るゲー

ムをした時に、クラスの人数の関係で余ってしまう子どもが出てきた。それを見て池上ダイレクターは解決策を言わず、「どうしたらいいかな」と問い掛けた。子どもの中から「コーンを回り終えたチームがバラバラになり、別のチームに入って仲間になればいい」といった意見が次々に上がった。90分の授業時間中、池上ダイレクターは一度も大きな声を出すことなく、子どもの言葉を温かく受け止め、時にユーモアを交えて切り返し、子ども本来の自由な発想や自発性を引き出した。橋本京子校長は「池上さんは、子どもの小さなつぶやきでもすくい取り、子どもに考えさせていた。学校の教員もこの手法を取り入れていける」と感心する。

終了後、池上ダイレクターは約1時間半、橋本校長や担任教諭と懇談。話は教育論や学級運営にまで及んだ。橋本校長は「Jリーグのクラブの普及活動はサッカーの技術を教えてくれたり、一緒にサッカーをするというイメージしかなかったが、私たちと同じ立場で人を育てようという思いを持ってもらっているのはうれしい」と、深い結び付きを求めるサンガつながり隊の活動に賛同する。

池上ダイレクターは学校へのアプローチだけでなく、少年サッカーの指導者や保護者向けの講座も始めた。「スポーツ文化が地域に根差すために、Jクラブの指導者が街の人に顔を売ることも大切」と精力的だ。トップチームの選手が憧れの対象として学校や地域に出向く一方、つながり隊は共生を目指し草の根の活動を展開。両輪がかみ合い、ホームタウンへの密着が進んでいる。

(京都新聞社 国貞 仁志)



橋本京子氏



仲間づくりの大切さを伝えるサンガつながり隊の活動。府内各地で好評を得ている ©KYOTO.P.S.

「東日本大震災復興支援 2012 Jリーグスペシャルマッチ」を 7月21日に開催

Jリーグは6月11日、東日本大震災の復興支援活動の一環として7月21日(土)に県立カシマサッカースタジアムで開催される「東日本大震災復興支援 2012 Jリーグスペシャルマッチ」の大会概要、ロゴマークを発表した。

大東和美 Jリーグチェアマンが「震災で大きな被害を受けたスタジアムに Jリーグのプレーヤーが結集し、最高のプレーを皆さまにお見せすることで、Jリーグとして復興支援を力強く進めていくことを表現できればと思う」とあいさつ。また、被災地のクラブを代表してベガルタ仙台の関口訓充、鹿島アントラーズの小笠原満男の両選手も出席。関口は「この試合がすごく盛り上がるように、また被災した地域に元気を与えられるようなプレーができるように頑張る」、小笠原は「Jリーグを代表する選手たちといひ試合をして、被災された方々にも喜んでいただくことができればと思う。今から試合を楽しみにしている」と話した。

対戦するのは、仙台と鹿島、東北地方出身選手、さらに海外からのゲスト選手からなる「Jリーグ TEAM AS ONE」と、仙台、鹿島、東北地方出身選手を除く J1リーグの16チームから選出した選手によって構成される「Jリーグ選抜」。前者は仙台の手倉森誠監督が指揮し、鹿島のジョルジーニョ監督がコーチとして補佐。後者は2011シーズンに柏レイソルを J1 初優勝に導いたネルシーニョ監督が率いる。

出場選手の選考は、Jリーグトップパートナーの株式会社コナミデジタルエンタテインメントの協力を得て、サポーター投票サイトを通して行われた。最終得票の上位選手(GKは1人、DF、MF、FWは各3人)に、DF、MF、FW各ポジション次点選手の中で最多得票の選手1人を加えた11人を「サポーター投票選出選手」とし、対戦する2チームに振り分け。その他の選手については、投票の結果を参考に「Jリーグ推薦選手」を選出し、Jリーグスペシャルマッチ出場選手選考委員会にて決定。なお、J1各クラブより1人以上を選出し、外国籍選手の出場人数に制限はない。また、第30回オリンピック競技大会(2012/ロンドン)に出場する日本代表選手は選出しない。出場選手の発表は、7月上旬に行われる。



大会概要発表に出席した、左から鹿島の小笠原、大東チェアマン、仙台の関口



Jリーグ TEAM AS ONEを率いる手倉森監督



ネルシーニョ監督は Jリーグ選抜の指揮を執る



スペシャルマッチの会場となる県立カシマサッカースタジアム。当日は、スタジアムの内外でさまざまなイベントの開催が予定されている

大会ロゴマーク

【メッセージ】
サッカーを通じ「ひとつ」になった「チカラ」が広がる、届く。
TEAM AS ONE、Jリーグ。

東日本大震災復興支援
2012 JLEAGUE
SPECIAL MATCH
July 21st
at KASHIMA

「TEAM AS ONE」は、「Jリーグ」「クラブ」「選手」「ファン・サポーター」「被災地復興を願う全ての人々」、この5つの「チカラ」が「ひとつ」に団結して支援の輪が広がってゆく様子をイメージしてマーク化したもの。さらには、一つのボールのもとに、世界中(5大陸)の「仲間」が手を取り合う姿をも意味する。今回の大会ロゴマークでは、昨年の震災後、ひとつになった「チカラ」がさらに広がっていく様を描いている。

大会概要	
大会名称	東日本大震災復興支援 2012 Jリーグスペシャルマッチ
開催日時	2012年7月21日(土) 19:00キックオフ(予定)
会場	県立カシマサッカースタジアム(茨城県鹿嶋市)
主催	公益財団法人 日本サッカー協会 / 公益社団法人 日本プロサッカーリーグ
共催	一般社団法人 日本プロサッカー選手会 / 一般社団法人 Jリーグ選手OB会
主管	公益社団法人 日本プロサッカーリーグ / 財団法人 茨城県サッカー協会
運営協力	鹿島アントラーズ
協賛	株式会社コナミデジタルエンタテインメント / 朝日新聞社
協力	アディダス ジャパン株式会社 / 株式会社モルテン / 株式会社コナミデジタルエンタテインメント
対戦	Jリーグ TEAM AS ONE vs Jリーグ選抜
試合方式	90分間(前後半各45分)の試合を行い、勝敗が決しない場合は引き分け

※上記は6月22日時点での情報

